

2008. 09. 16 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

出エジプト記 2章23節から3章17節

それから何年もたって、エジプトの王は死んだ。イスラエル人は労役にうめき、わめいた。彼らの労役の叫びは神に届いた。神は彼らの嘆きを聞かれ、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。神はイスラエル人をご覧になった。神はみこころを留められた。モーセは、ミデヤンの祭司で彼のしゅうと、イテロの羊を飼っていた。彼はその群れを荒野の西側に追って行き、神の山ホレブにやって来た。すると主の使いが彼に、現われた。柴の中の火の炎の中であつた。よく見ると、火で燃えていたのに柴は焼け尽きなかった。モーセは言った。「なぜ柴が燃えていかないのか、あちらへ行ってこの大なる光景を見ることにしよう。」主は彼が横切つて見に来るのをご覧になった。神は柴の中から彼を呼び、「モーセ、モーセ。」と仰せられた。彼は「はい、ここにおります。」と答えた。神は仰せられた。「ここに近づいてはいけない。あなたの足のくつを脱げ。あなたの立っている場所は、聖なる地である。」また仰せられた。「わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは神を仰ぎ見ることを恐れて、顔を隠した。主は仰せられた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の悩みを確かに見、追い使う者の前の彼らの叫びを聞いた。わたしは彼らの痛みを知っている。わたしが下つて来たのは、彼らをエジプトの手から救い出し、その地から、広い良い地、乳と蜜の流れる地、カナン人、ヘテ人、エモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人のいる所に、彼らを上らせるためだ。見よ。今こそ、イスラエル人の叫びはわたしに届いた。わたしはまた、エジプトが彼らをしいたげているそのしいたげを見た。今、行け。わたしはあなたをパロのもとに遣わそう。わたしの民イスラエル人をエジプトから連れ出せ。」モーセは神に申し上げた。「私はいったい何者なのでしょう。パロのもとに行つてイスラエル人をエジプトから連れ出さなければならぬとは。」神は仰せられた。「わたしはあなたとともにいる。これがあなたのためのしるしである。わたしがあなたを遣わすのだ。あなたが民をエジプトから導き出すとき、あなたがたは、この山で、神に仕えなければならない。」モーセは神に申し上げた。「今、私はイスラエル人のところに行きます。私が彼らに『あなたがたの父祖の神が、私をあなたがたのもとに遣わされました。』と言えば、彼らは、『その名は何ですか。』と私に聞くでしょう。私は、何と答えたらよいのでしょうか。」神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある。』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエル人にこう告げなければならない。『わたしはあるという方が、私をあなたがたのところへ遣わされた。』と。」神はさらにモーセに仰せられた。「イスラ

エル人に言え。あなたがたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主が、私をあなたがたのところに遣わされた、と言え。これが永遠にわたしの名、これが代々にわたってわたしの呼び名である。行って、イスラエルの長老たちを集めて、彼らに言え。あなたがたの父祖の神、アブラハム、イサク、ヤコブの神、主が、私に現われて仰せられた。『わたしはあなたがたのこと、またエジプトであなたがたがどういうしちを受けているかを確かに心に留めた。それで、わたしはあなたがたをエジプトでの悩みから救い出し、カナン人、ヘテ人、エモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の地、乳と蜜の流れる地へ上らせると言ったのである。』

今日も、前二回に引き続き『わがしもべモーセ』という題名で、モーセの生涯を学んでみたいと思います。

モーセはまことに主に仕える者でした。聖書の中で何度も「主に仕えなさい」と命令されています。主のしもべであるパウロも、同じことを信じる者に何度も勧めたのです。

エペソ人への手紙 4章1節

さて、主の四人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。

救われることは感謝なことですが、それだけで十分ではありません。「その召しにふさわしく歩みなさい」と。

エペソ人への手紙 1章18節、19節

また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、…知ることができますように。

パウロは、救われた人々のために祈り続けました。テサロニケ第二の手紙の中で、彼は、今度はテサロニケにいる兄弟姉妹に書き送ったのです。

テサロニケ人への手紙・第二 1章11節、12節

そのためにも、私たちはいつも、あなたがたのために祈っています。どうか、私たちの神が、あなたがたをお召しにふさわしい者にし、また御力によって、善を慕うあらゆる願いと信仰の働きとを全うしてくださいますように。それは、私たちの神であり主であるイエス・キリストの恵みによって、主イエスの御名があなたがたの間であがめられ、あなたがたも主にあって栄光を受けるためです。

信じる者の成長こそ、パウロの願いでした。

もう一箇所、ペテロ第二の手紙の中に次のように書かれています。

ペテロの手紙・第二 1章10節、11節

ですから、兄弟たちよ。ますます熱心に、あなたがたの召されたことと選ばれたこととを確かなものとしなさい。これらのことを行なっていれば、つまりくことなど決してありません。このようにあなたがたは、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの永遠の御国にはいる恵みを豊かに加えられるのです。

新約聖書の手紙は、イエス様を紹介することよりも、信じる者の成長のために書かれたものです。すなわち、「忠実なしもべであるモーセのように、主に仕えなさい」と。

今まで学んだことは、モーセが上からの光によって、エジプトを去り、心のエジプトから解放され、荒野で四十年間教育された後、主はご自分への奉仕者としてモーセを召されたことです。このモーセの召しの体験は全く個人的な体験でした。主は、モーセに対して、個人的に親しくお会いになったのです。

私たちも、失われていく魂に対する深い同情を抱いているからというので奉仕するだけではありません。「まことの召し」とは、人間の同情心から起こるものではなく、主なる神ご自身が、個人的にその人にお会いになって召された場合に、その人は初めて「主のしもべ」となり、「主に召された人」となる、と聖書は語っているのです。

主は、モーセのためにモーセを召されたのではありません。主は、「ご自身の民を解放する」ために、その用いる道具としてモーセを召されたのです。主が召し給うなら、それは、主の道具として召してくださるのです。

では、道具とはどのようなものなのでしょう。例えば、ギデオンも主のしもべであり、主の用いられた道具でした。

士師記 6章34節前半

主の霊がギデオンをおおったので、

と書かれています。原語では、「主の霊がギデオンを着た」という意味になっています。つまり、主の霊がギデオンの中に満ち満ちて、ギデオンはただ主の霊を包む着物のようなものとなった、という意味です。

まことの主のしもべは、ギデオンと同じように聖霊を包む着物のようなものです。それに比べると、私たちは何とか離れたところにいることでしょう。道具はそこにあるだけでは役に立ちません。用いられなければ何の役にも立たないのです。

モーセは、あのホレブの山で燃える柴、「主の火」を見て召し出された者となりました。ここで言う「神の火」は、言うまでもなく「聖霊」を意味しているのです。主によって、聖霊によって、召し出された主のしもべは、ギデオンがそうであったように聖霊の「着物」に過ぎず、また聖霊を満たす「器」に過ぎません。ですから、神のしもべは聖霊に満たさ

れていなければ、「何の役にも立たない着物や器」に過ぎないのです。ギデオンやモーセのように、私たちも「主の霊」により、「満たしに満たされた器」となりたいものです。

イザヤ書6章8節に、次のように書かれています。

イザヤ書 6章8節

私は、「だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう。」と言っておられる主の声を聞いたので、言った。「ここに、私がおります。私を遣わしてください。」

また、パウロはガラテヤ地方にいる兄弟姉妹に、次のように書きました。

ガラテヤ人への手紙 3章27節

バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。

「あなたがたは、キリストをその身に着た」と。

モーセは、「神の炎」により召されました。今日はこの「主の炎による召し」、或いは「聖霊による召し」について、少しだけ考えたいと思います。

モーセが召されたその召しの背後には、二つの見逃すことのできない理由がありました。

- ・一つは、「イスラエルの民が呻き、叫び、悩み、その苦しみが主の耳に届いた」とあります。
- ・二番目に、主が昔アブラハムに約束された契約が成就されなければならないという理由があったのです。

モーセが召された時は、エジプトで教育を受けたり、言葉にも技にも力のあった、あの偉大なモーセではありませんでした。モーセが「主の霊」によって召された時は、まだただの羊飼いに過ぎなかったのです。主は、偉大な人や自分で何かできると思っている人々を用いようとなさいません。荒野に生えている目立たない柴のような「へりくだった人」を召してくださるのです。

目立たない荒野の柴は、ホレブの山の上で「神の火」によって盛んに燃やされました。荒野の柴のような、へりくだった目立たない羊飼いのモーセは、「主の火」によって燃やされました。

モーセが「主の火」によって召し出された時は、すでに彼の全生涯の三分の二、八十年が過ぎ去っていました。モーセは、「八十年は全く無駄であった」と考えていたかも知れませんが、主の御目には無駄ということはありません。では、モーセがそれまでに過ごした八十年は、何のために必要だったのでしょうか。モーセが「空っぽの器」となるために必要でした。

燃える柴は、モーセが主に見捨てられなかったというしるしです。主は、柴の中からモーセを呼んで、「モーセよ。モーセよ」と個人的に親しく呼びかけ、モーセを今まで見放しにしてはおられなかったことを明らかにされました。出エジプト記の3章14節を見ると、出エジプト記 3章14節前半

神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある。』という者である。」

と書かれています。主はモーセに、「ありてある者」というご自身の姿をお示しになりました。モーセが主に出会ったこの日は、普通の日でした。羊の群れをその日も荒野の奥に導いて、主の山ホレブに来たところ、「主の召し」がそこに待っていたのです。これでもわかるように、主の召しは人の努力では与えられません。一方的に主のなさる業です。

モーセが出会った「神の炎」は、いったいどのようなものだったのでしょうか。

- 一番目、生きている炎でした。
- 二番目、主によってつけられた炎でした。
- 三番目、盛んに燃え上がる炎でした。
- 四番目、燃え尽きない炎でした。
- 五番目、聖なる炎でした。
- 六番目、預言の炎でした。

*第一番目、まず「生きている炎」について、少しだけ考えたいと思います。

モーセが柴を見ていますと、柴は燃えているのに、その柴はなくなりませんでした。盛んに燃え続けていました。これは、主なる神の本質を現わしています。「わたしはある」。永遠から永遠に変わりなく生きて給う神が、燃える柴に現われなされたのです。

もし、私たちがモーセと同じように生きている炎によって召し出された者なら、私たちの証しも永遠に生きてとどまる証しとなるはずです。もし、主の霊によって私たちが生かされているなら、人々は私たちのところに引き寄せられ、私たちのうちに「生ける主」を見るでしょう。

これに対して、もし人々が私たちの所に来て失望してしまうなら、私たちのうちに神の霊が盛んに生きていないのであり、私たちはギデオンやモーセのような「神のしもべ」とはなっていないのです。

バプテスマのヨハネも、やはり主のしもべでした。彼は自らを、自分は「荒野で呼ばれる声である」と証ししました。彼は、自らを人に現わそうとしなかったのです。「ただの声」でした。「主の声」でした。ヨハネが叫んだ時、多くの人々は主の御許（みもと）に立ち返っていたではありませんか。

もし、私たちも「主のしもべ」になりたいなら、「ただの声」にならなければいけません。まことの主のしもべは、いつも生き給う主に仕えるという特権を与えられ、喜んで奉仕しています。喜んで、自発的に主に仕えるしもべたちこそ、捜し求められています。聖霊に

満たされたヨハネは絶えず、「私は大切ではない。無視されても、殺されても結構です」という態度をとったので、用いられました。

「主の炎」は、どのような炎だったのでしょうか。「生きている炎」です。

*第二番目、「主によって灯された炎」です。

主の山ホレブに燃えさかった柴の火は、人間が点けたものではありません。主ご自身自ら灯された火でした。旧約聖書の神の住まいである幕屋に灯された神の火も、人間が点けたものではありませんでした。主なる神ご自身が上から下された火だったのです。

私たちイエス様によって救われた者は、「聖霊の宮」と呼ばれています。私たちも上から火を灯されなければいけません。イエス様は、「わたしは地上に火を投じるために来た」と仰せになりました。けれどイエス様は、地上に火を投じる前に、まず自ら死を通らなければならなかったのです。

モーセも、主の火によって召し出される前に、荒野で四十年間死の訓練を受けました。そしてモーセのこの火の体験は、続いていく奉仕の源でした。私たちのご奉仕の源はどこにあるのでしょうか。私たちは主によって火を灯された器なのでしょうか。

詩篇の作者は、次のように書いたのです。

詩篇 104篇4節

風をご自分の使いとし、焼き尽くす火をご自分の召使とされます。

と書かれています。生ける主のまことのしもべは、聖霊によって火を灯された者です。

アロンの二人の息子は、主の前に異なった火をたいて殺されてしまいました。同じように、私たちも生まれながらの性質を持ち、生まれながらの賜物を持ち、自分の力で奉仕をしようとするならば、結果は、永遠に残る実が残らないこととなります。私たちの奉仕はいつも聖霊に導かれ、聖霊の満たしのうちに行なわれるようになりたいものです。

モーセが出会った「神の炎」は、どのような炎だったのでしょうか。今話しましたように、「生ける炎」でした。そして、「主によって灯された炎」だったのです。

*第三番目、「盛んに燃え上がる炎」だったのです。

モーセの見た柴の炎は、盛んに燃え上がっている炎でした。柴はみな燃えさかっています。全く失望し、自らの内に何の良きものもないことを見出し、空っぽになり、裸になったモーセに、主は盛んに燃える炎のうちに現われなされたのです。私たちの全生涯も、盛んに燃えて尽きない炎となりたいものです。

そうされるために、まず燃える炎のうちに自らを現わし給う主にお会いしなければなりません。主のしもべは、この燃えさかる炎がどうしても必要です。悪魔はそのようなことは起こらないと感わします。

神の山ホレブの柴は盛んに燃えましたが、その時、主の御心も主の民イスラエルの救いのために燃えさかっていたのです。主は他の民も御心に留めておられましたが、特にイスラエルの民を祝福しよう、用いようとして、切なる気持ちを持っておられたのです。

ヨシュアは、イスラエルの民のために用いられました。その時、ヨシュアは主なる神が太陽の運行をもとどめることができになるという経験したのです。（ちょっと考えられないことですが事実です。）ヨシュアは、イスラエルの民のためなら主は太陽の運行をもとどめることができになると経験しましたので、主にとって不可能なことはないと確信できたのです。

燃えて輝く炎は、主が聖霊をもって私たちを全く満たされたいということを現わしています。私たちが全世界に一人しかいない者のように、主はご自身の心を一人一人に集中して愛してくださっているのです。

モーセが会った「神の炎」は、どのようなものだったのでしょうか。「生きている炎」、「神によって灯された炎」、「盛んに燃え上がる炎」でした。

* 第四番目、「燃え尽きない炎」だったのです。

この燃えて尽きない炎は、私たちに何を教えているのでしょうか。この炎は、私たちの神が「望みの神」であられることを物語っています。モーセの生きていた五百年前に、主は、すでにアブラハムにカナンの地を与えるという契約を結んでおられました。それから五百年経った今、主は、モーセを用いてこの契約を実現しようとしておられたのです。

エジプトの王宮にいたモーセは、それをもちろん知りました。しかしモーセは、この主の大事業を成し遂げるために、四十年間待たなければならなかったのです。その間モーセは、疑いもし、失望もしたことでしょう。けれども今、モーセは主の山ホレブで、燃えて尽きない「神の火」を目の当たりにして、「我が主は望みの神である」ということを、新しく確信するようになったのです。

モーセの時代に主は、ご自分の民イスラエルの民にのみ、御心の全部を傾けておられましたが、今は違います。主は今、全世界のあらゆる国民から、「救われて主につく人々」を選び出し、それらの人々に御心の全部を傾けておられます。そして主は、最後のご目的として、これらの「選民」によって全宇宙が支配されることを望んでおられるのです。これらの「選民」を通してご自身の栄光を全宇宙に現わされたい、と聖書は語っているのです。

主は、このご目的を決して捨てることをなさいません。必ず達成なさいます。モーセを召し出された時に燃えて尽きなかった炎のように、主のご目的はあきらめることを知らず、望みに燃えて、このご目的に向かって進んでいるのです。主は、ご自身のご目的を成し遂げないではおられません。何があっても、「燃えて尽きない炎」のように、ご目的を最後まで成就されます。

私たちは主に召されました。ですから、主は決して私たちを悔いることをなさいません。パウロはローマ書の中で、

ローマ人への手紙 11章29節

神の賜物と召命とは変わることはありません。

「主の賜物と召しとは変わることがない」と記しています。主は、私たちの状態を全てご承知の上で召してくださいました。ですから、私たちがどんなに足りない者であっても、主はこのことを後悔することはなさいません。主が私たちのうちに始められたみ業は、誰によっても、また何者によっても、妨げられることはありません。

イザヤ書から一箇所読みましょう。

イザヤ書 62章10節から12節

通れ、通れ、城門を。この民の道を整え、盛り上げ、土を盛り上げ、大路を造れ。石を取り除いて国々の民の上に旗を揚げよ。見よ。主は、地の果てまで聞こえるように仰せられた。「シオンの娘に言え。『見よ。あなたの救いが来る。見よ。その報いは主とともにあり、その報酬は主の前にある。』と。彼らは、聖なる民、主に贖われた者と呼ばれ、あなたは、尋ね求められる者、見捨てられない町と呼ばれる。」

と書かれています。これは主の、変えられることのない「選びの民」に対する約束です。

モーセが会った神の炎はどのようなものだったのでしょうか。燃え尽きない炎でした。「主の火」は、決して消えることはありません。しかし、人間の点けた火はすぐに消えてしまいます。

なぜ人の火は神の火と違ってすぐに消えてしまうのでしょうか。火が消えてしまう理由があります。三つあるのではないかと思います。

1. 歩き回っている悪魔。
2. 私たちが希望を失うため。
3. 絶えず誤解され続けることから。

1. 歩き回っている悪魔

神の敵、また私たちの敵である悪魔が、食い尽くすべきものを求めて歩き回っています。火を消そうとして歩き回っているのです。

モーセの生まれる前、悪魔は何かしてモーセを食い尽くそうと思い、政治的に、また社会的に、モーセを抹殺する計画を立てていました。悪魔は、モーセが「神のしもべ」となり、神の御手に握られた道具となることを、前もってよく知っていたからそうしたので。けれども全能なる神は、モーセを豊かにお守りになりました。最大の敵であったエジプトの王パロの娘をさえ主は用いて、モーセを守られたのです。モーセが生まれた時に、

悪魔は吠え猛る獅子のようにモーセを攻撃してきました。しかし、主はモーセをお守りになったのです。

次に、今度は、悪魔は吠えたける獅子のようではなく、光の御使いに似た姿をとってモーセを攻撃したのです。光の御使いのような姿をとってモーセの中に入り込み、モーセのうちの「燃える火」を消そうとしました。モーセはすさんだ貧しい生活をしていただけではありません。何でもできる、すべてのものが自分のものとなる、エジプトの王子としての生活をしていただけでした。悪魔はそこにつけ込んできました。第一の攻撃より、この攻撃の方がどんなに恐ろしかったかしれません。エジプトとエジプトの宝をモーセの前に差し出し、誘惑して、モーセの「心の火」を消そうとしました。

悪魔は、現在、私たちをもそのようにして攻撃しているかもしれません。よく心の目を開き、悪魔の誘惑に陥らないようにしていなければ、私たちの火はすぐに消えてしまうでしょう。

火が消えてしまう理由は、今話しましたようにまず、歩き回っている悪魔です。

2. 私たちが希望を失ってしまうためです。

モーセは、四十年間待たねばなりませんでした。この長い間、待たねばならない時間は、モーセにいろいろな影響を与えました。日は過ぎ、年は去り、以前約束した主の約束は次第に古くなってしまったのです。まだ主の約束の成就を見ることができません。この間、モーセは焦りました。もし神がなさらなければ自分がやると言って、エジプト人を殺してしまいました。モーセが自ら行なったことは、当然失敗に終わりました。モーセは、主のご目的を知っていましたが、待たなければならない時期があったのです。しかし、忍耐できずに自ら行なって失敗を招き、希望を失いそうになってしまいました。

私たちも、神のご目的を心の内に深く知りながら、なかなかそこに到達できないことがあるかも知れません。そのような時、焦って望みを失ってしまう危険があるわけです。

火が消えてしまう理由は三つです。歩き回っている悪魔、それから希望を失うためです。そして、

3. 絶えず誤解され続けることでした。

モーセは、パロの娘の子と呼ばれることを厭い、将来に約束されていたエジプトの多くの宝を全て捨て去り、主のために尽くす決心をしました。そして、モーセは敢然と立ち上がり、エジプト人を殺しました。しかしその時、自分の兄弟イスラエル人たちはモーセを理解してはくれなかったのです。モーセは自らの命を気遣ってエジプトを離れ、ミデヤンの地に逃げなければならなかったのです。モーセは辛かったと思います。主が自分を召されてイスラエルの解放者としてくださった、だから自分は今エジプト人を打った。しかし、民は自分を理解してくれず、命を気遣って自分は遠くへ逃げなければならない。モーセは矛盾に苦しんだに違いありません。

しかし、その後のモーセはどうだったのでしょうか。イスラエルの民を率いてエジプトを出発し、荒野を四十年間さまよった時、モーセはやはり誤解され続けたのです。モーセが率いていたイスラエルの民は「神の民」であり、主を信じた者でした。救いに与った者でした。しかしこの民は、モーセを理解せず、モーセを攻撃し、批判し、モーセに逆らい続けました。

モーセの心の内に燃えている火は、風前の灯のように消されそうにならないはずがありません。モーセはそのような時、いつも神の山ホレブで目の当たりにした、「燃えて尽きない神の炎」を思い浮かべ、裏切ることのない、極みまでご真実な神にすがり、常に光を受けて立ち上がったのです。私たちも、どのようなことがあっても、真実なる主におすがりしていきたいものです。

モーセが「燃える神の炎」を見たとき、神はモーセの心の内にも灯されました。モーセが主にお会いしたとき親しく主を拝したので、主のご性質がモーセの中に注ぎ込まれました。モーセは主が燃えて尽きない柴の中から、「われはありてある者なり。わたしは、『わたしはある』という者である」と語られて以来、モーセの心に燃えて尽きない炎が灯されました。この燃えて尽きない炎は、モーセを全く解放したのです。

そして、燃える火を心の中に宿しているモーセにより、イスラエルの民はエジプトから導き出されました。

*第五番目、「聖なる炎」でした。

この炎は、普通の炎とは違っていました。この炎は主なる神の「聖いご臨在」を示す炎でした。炎は燃えていましたが、燃え尽きませんでした。この炎は役に立たないものを焼き尽くし、役に立つものを成長させる炎でした。

もし、主が臨在し給うなら、主は私たちの不義不法を焼き尽くし、主の御心にかなうものを芽生えさせてくださるはずです。へブル書の著者は記したのです。

へブル人への手紙 12章29節

私たちの神は焼き尽くす火です。

モーセは炎を見定めようとして、それに近づきました。すると主はモーセに、「ここに近づいてはいけない」とおっしゃったのです。どうしてでしょうか。主は、モーセに本来のあり方を教えようとなさったのです。

次に、「足から靴を脱ぎなさい」と言われましたが、これは、自らの計画や自らの思いを捨て、ただ主にのみ頼りなさいという意味です。ただ主にのみ頼りなさい、と。

パウロたちも、これを学ばなければならなかったのです。ですから、パウロはコリント第二の手紙の中で、次のように証しとして書き記したのです。

兄弟たちよ。私たちがアジヤで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにはいのちさえも危くなり、ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。ところが神は、これほどの大きな死の危険から、私たちを救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいます。なおも救い出してくださいという望みを、私たちはこの神に置いているのです。

伝説によると、モーセはエジプト人の長官であったということです。従って、モーセには人々を指揮し、指図する習慣がついていました。しかし、「そのようなものを捨て、すべて主にゆだね、主にだけ信頼しなさい」と、主はここで教えられたのです。

「燃えて尽きない炎」は、どこまでも忍耐し、耐え忍ぶ主のご性質を示しています。これは、モーセにはなかった性質でした。モーセは神に召し出され、まことのご奉仕にあたる前に、まず自らの靴を脱がなければならなかったのです。すなわち、自らを全く捨て去らなければなりませんでした。

私たちの場合も同じです。主のみ顔を親しく拝するには、まず自らの靴を脱ぎ、己を全く捨てなければなりません。それは主の順序です。それは、もちろん十字架に来て救われるという意味ではありません。救われたいのち、主の十字架を負い、主の御足跡をたどることを意味しているのです。

モーセが会った「神の炎」は、どのようなものだったでしょう。今話しましたように、「生きている炎」であり、「神によって灯された炎」であり、「盛んに燃える炎」であり、「燃え尽きない炎」であり、また「聖なる炎」でした。

*第六番目、「預言の炎」でもあります。

モーセの時代に一番大切なことは、イスラエルの民をエジプトからカナンの地に導き出すことでした。このためにモーセは、「燃える炎」によって召し出されたのですが、この炎は、未来の時代に起こることを「預言」しています。

はじめに言いましたように、モーセはイエス様の雛形です。イエス様は、預言の炎によって預言されたように、それからしばらくの後、全人類を救いに導くためにおいでになられたのです。救われている私たちも、イエス様と共に多くの人々を主のもとに導き、それらの人々をイエス様の満たしにまで至らせるために働く者です。出エジプト記3章12節。もう一度読みます。

出エジプト記 3章12節

神は仰せられた。「わたしはあなたとともにいる。これがあなたのためのしるしであ

る。わたしがあなたを遣わすのだ。あなたが民をエジプトから導き出すとき、あなたがたは、この山で、神に仕えなければならない。」

同じく出エジプト記 19 章 18 節を見ると、次のように書かれています。

出エジプト記 19 章 18 節

シナイ山は全山が煙っていた。それは主が火の中にあって、山の上に降りて来られたからである。その煙は、かまどの煙のように立ち上り、全山が激しく震えた。

と記されています。

もう一箇所、

出エジプト記 24 章 17 節

主の栄光は、イスラエル人の目には、山の頂で燃え上がる火のように見えた。

と書かれています。

モーセが召されたときには燃える柴がありました。しかしその後、モーセは燃える山に遭遇しました。これはまた、私たちに対する約束を意味しています。「燃える柴」の経験をした者は、続いて他の人々を同じ経験に導くことができるのです。

燃える柴を経験したモーセに導かれたイスラエルの民は皆、燃えるシナイ山を目の当たりにするというすばらしい経験をしました。私たちは自分で経験しないことを人に伝えることはできません。どんなに話してもそれが自らの体験でなければ、人々に生きて働きません。もし、私たちがモーセのように主のしもべとして奉仕したいのなら、モーセと同じ体験が必要です。

モーセは燃える炎を見た時、モーセ自身も炎に変わりました。私たちも、主のために奉仕する「燃える炎」となっているのでしょうか。主は頭の良い人、いろいろできる人を求めておいでにはなりません。どんなに貧しい荒野の柴のような者でも良いのです。その柴を「ご自分の火」によって燃やし、お用いになりたいのです。モーセは神のしもべでした。主は、こんにちも「ご自分に仕えるしもべ」を求めておられます。

私たちは、「聖霊の火」によって、主のしもべとなることができます。

ギデオンは、内に聖霊を宿し、聖霊を包んでいる着物のようなものでした。

アブラハムには、一人の忠実なしもべがいました。彼はある日、主人アブラハムの息子イサクの花嫁を捜す使命を負わせられて遠くへ旅出しました。しもべの使命は、イサクの花嫁を見つけ出すことだけでなく、花嫁をイサクのもとに連れてきて、イサクのものとさせる使命でした。

神のしもべの使命は、失われていく人々を導いて救いに入れることだけではありません。花嫁を見つけ出すことだけでもありません。救われた信者をキリストの花嫁とし、全くキ

リストと一つにさせることも、主のしもべとしての大切な務めです。もし、私たちが聖霊により火を灯され、私たち自身が「生きている炎」となるなら、まことの神のしもべとなるのです。

アブラハムはただ一人のしもべをもって用立てました。それと同じように、こんにち主なる神はただ一人の忠実なしもべ、すなわち「聖霊」をお用いになっておられます。この聖霊により、目立たない「荒野の柴」は、盛んに燃えて、尽きない炎と化せられます。

主の御心は、荒野の柴のような私たちが、「神の火」を、ご聖霊を持ち運ぶ者となることです。もし、私たちがそうなったら、柴の中から主の声を聞くことができます。その時、柴はほとんど目に入らず、主だけが外に現われなさいます。

モーセにとってなかなかできなかったことは、「自分が取り柄のない普通の荒野の柴である」ということを素直に認めることでした。モーセは何か優れた特別な柴でありたかったのです。けれどもモーセは四十年かかって、自らの真相をわきまえ知ることができたのです。主は特別に際だった柴を求めておられません。きわめて普通の柴を求めておられます。

主は自らを「ありてある者」と仰せになりました。このありてある者は、全く無きに等しい者の中に宿り給いて、自らを現わされたいのです。私たちが神のしもべであるモーセのように、「普通の荒野の柴」になりたいものです。

バプテスマのヨハネと同じように、「彼は必ず栄え、また私たちは必ず衰えるように」という心を、主の御前に絶えず持ち続けたいと願うならば、主は必ず恵んでくださるのです。

了